

A学校教育目標
国際的視野を持ち、未来を切り拓くグローバルキャリア人としての基本的な資質の育成 〔自律〕自ら進んで生活を築いていく子ども 〔尊重〕国際的な視野と広い心を持ち、互いを尊重し合う子ども 〔創造〕豊かな感性と探究的な思考力を働かせて、文化を創造していく子ども

Bめざす学校像	C育てたい力・態度		D育て方の方針	【評価項目】 F育て方の具体／重点事項等	自己評価
B1 子どもに対して、自律、尊重、創造に関わる力や態度を育む教育活動を展開することで、学校教育において、「めざす子ども像」の実現を支援する役割を担う。	自律	C1 自分の生活を自分でコントロールする力や態度 C2 みんなにとってのよりよい生活を考え、そのために自分ができることをする力や態度	D1 「小さな社会人」として、信頼されるふるまい方を知ったり、考えさせる。	F1 自分が所属する学級・学年集団を自己評価する機会を設定し、それを生かした指導をすることができたか。	児童アンケートにおいて、「私は、以前よりみんなにとってのよりよい生活を考え、そのために自分ができることをしている」とふりかえる児童の割合を90%以上にすることを指標とし、左記の取組を実施した結果、92%であった。集団としての成長を考えることが、個人の成長につながるきっかけになったと考えられる。
		尊重	C3 他者とは異なる自分の文化や考えを大切にしようとする力や態度 C4 自分とは異なる他者の文化や考えを楽しみ、大切にしようとする力や態度 C5 自他の存在や行動を価値付けることができる力や態度	D2 自分を表現する経験とともに、自分とは異なる文化や考え方の良さを感じる経験を豊富に設定する。	F2 学年担任制、授業サポーター制の創造的な運営等によって、教師の指導性を適切に発揮し、日々の学習において、主体的・対話的で深い学びを実現することができたか。
	創造		C6 前例、他者等に依存せず、自分の置かれた状況において、工夫してよりよいものを作り出そうとする力や態度 C7 他者と質の高い合意形成をする力や態度	D3 合意形成を図る過程でその「難しさ」と「大切さ」を感じる経験を豊富に設定する。	F3 清掃活動によって、異年齢集団での学習を主軸にした特別活動を充実させることができたか。
		D4 子どもの感性を刺激する知的な教育活動の提供する。		F4 大学との連携・共同研究、並びに大学附属間の交流を通して、知的好奇心を喚起することができたか。	
B2 保護者に対して、子どもに自律、尊重、創造に関わる力や態度を育むための情報発信・交流の機能を果たすことで、家庭教育において、「めざす子ども像」の実現を支援する保護者をサポートし、導く役割を担う。				(B2) 保護者に対して、子どもに自律、尊重、創造に関わる力や態度を育むための情報発信・交流の機能を果たすことで、家庭教育において、「めざす子ども像」の実現を支援する保護者をサポートし、導く役割を担うことができたか。	保護者アンケートにおいて、「学校は、懇談会、学校HP、学校だより、学年だより等で、教育活動の方針や手立てをわかりやすく伝えている。」とふりかえる保護者の割合を90%以上にすることを指標とし、学校懇談会、学級・学年懇談会、学校通信、学年通信などで、工夫した情報発信をした結果、96%であった。紙媒体で十分伝わらず、情報の解釈に誤解があることがアンケートなどから分かった場合は、積極的に電話連絡を行い、意思疎通を図った。
B3 教育界（学会や他学校園等）に対して、大学との連携による学術的な知見と、現場における実践的な知見とを融合した研究成果を発信することで、実践的研究の中核拠点としての役割を担い、教育の質的向上に寄与する。				(B3) 大学との連携による研究を外部発信することができたか。 大学の教育実習計画に基づく教育実習を実施することで、学生の学びを保障することができたか。	6月と2月に研究公開を実施し、大学との連携による研究を外部発信した。参加者は、年間通して200名程度であり、これをきっかけに本校の教育に興味をもっていただくことにつながっている。 教育実習は、8月末から約1か月実施し、40名程度の学生を受け入れた。全体講義と学年別の実習を効果的に組み合わせた質の高い実習を実施した。実習後も本校教育に関わろうとする学生がいるなど、成果があった。

学校関係者評価	次年度に向けて
・学校行事において、児童が身振り手振りで友達に自分の想いを伝えている姿などが見られ、人と関わろうとする意識が高いことがわかる。たて割り班を主体にした特別活動も効果的だと考えられる。また、ふりかえりを重視することで、自分の取組を客観的に捉え直し、改善につなげるサイクルが学校全体として行われている。 ・教育課程特例校の指定を受けて実施している1,2年生の「せかい」によって、低学年から異文化に触れる活動が行われており、その意義についての外部評価では、88%が「非常に高い」、12%が「高い」と評価した。 ・保護者とともに教育することで、特色ある教育を実施していると評価できる。例えば、保護者と協力して国際交流の受け入れ事業を実現させ、子供たちに豊かな学びを提供している。また、学校懇談会等で教育理念を伝えた上で、アンケートを行うことで、保護者が自分自身の子育てをふりかえる場となっている。	・本校の特色ある取組を更に充実させていく。例えば、たて割り班を中心とした特別活動を充実させることや、教育課程特例校の指定を受けて実施している1,2年生の「せかい」の学習と、保護者と共同して実施してる国際交流の活動を関連付け、「せかい」の学習で学んだことを発信する場として国際交流の活動を位置付けることで、目的意識をより明確にした教育活動を行う。また、「附小のくらし」を子供自身が検討する場を設けることを通して、自分が所属する集団に必要なきまりを考え、必要に応じて変えていく教育活動を行う。 ・ふりかえりの場を更に充実させるなど、日常の授業だけでなく、学校行事でも子どもが「思考する機会」を、可能な限り設定する。 ・教育のパートナーとして、保護者と連携した教育を行う。学校懇談会では情報発信するだけでなく、保護者同士が交流する機会を設けることで、教育の質的向上を図る。